

Andrew Kertesz (著), 河村 満 (監訳)

バナナ・レディ
前頭側頭型認知症をめぐる 19 のエピソード

中島健二
(鳥取大学教授・脳神経内科学)

本書は、ウェスタン失語症総合検査(WAB)という失語評価法を開発した Andrew Kertesz 氏が“The Banana Lady and other stories of curious behaviour and speech”と題し、英国においてペーパー・バックとして一般読者向けに出版された本の日本語訳版である。本書の監訳は神経心理学に精通された本邦の代表的な神経内科医のひとりである河村満氏である。原著者の Kertesz 氏とは 30 年近くの付き合いだそうである。

前頭側頭型認知症(frontotemporal dementia: FTD)は、医学的に未だ不明な点が多く、実際の頻度も明らかではないが、本邦においても神経変性性の認知症の中ではアルツハイマー病、レビー小体型認知症に次いで多いとされる。1900 年前後に Arnold Pick が記載して以来、1 つの臨床症候群として知られてきたが、臨床的・病理学的特徴の多様性から、別々の疾患として報告されたりしてきた経緯もある。そのため、日常診療においてはアルツハイマー病や躁うつ病などと間違えられたりすることも多く、多くの症例が診断されなかったり、死後の病理学的検討によってやっと診断されたりしてきた。しかし、FTD という疾患名が登場して以来、再び注目が集まるようになった。また、近年ではタウ蛋白に続いて、TDP-43 や FUS などの新たな関連異常蛋白が報告され、その基礎医学的研究の発展も目覚ましく、大きな関心を集めるようになっていく。このような時期に本書が発刊されることは、まさに時宜を得ているものと思われる。

現在、認知症の診断において脳脊髄液を用いたバイオマーカーや脳画像検査などの補助診断法が発達してきているが、FTD の臨床診断の基本は詳細に聴取された病歴と診察に立脚する。しかし、FTD に特徴的な症状・症候を示す医学用語は、分かりにくい表現である傾向がある。例えば、「関心と洞察の欠如」と書かれても、これまでまったく FTD を診たこともない者にとっては、その用語から実際の症状を想像することは難しい。

本書の前半部のエピソード編では、FTD 患者について 19 編の物語が構成されている。本書のタイトルとなっている「バナナ・レディ」はエピソード 1 に記載されているバナナを大量に摂取する女性患者を示し、本エピソードでは FTD の典型的な強迫的な食行動が鮮明に描かれている。それ以外にもすべての症例に興味をそそるタイトルが付けられ、描かれている人物の異常行動や症状を印象付けられる。これらの 19 の物語を読むことにより、実際の患者を診なくても、FTD の重要な症状を容易に理解することが可能である。

後半の解説編では、FTD をめぐる歴史的な概念の変遷などを中心に、認知症の専門家である著者の研究的レビューがあり、一読に値する。また、日常診療においてすぐにでも役立つ介護者へのアドバイスも記述され、FTD の理解をさらに深めてくれる。まさに、FTD の教科書ともいえる内容でもある。

本書は、一般の読者向けに書かれているものの、FTD を学ぶ医学書としても十分に活用できる書物であり、FTD を知るための入門書として最適と思われる。医師ばかりではなく、コメディカルの方々や学生にもぜひともお薦めしたい。

●A5 判・232 頁
定価 3,570 円(本体 3,400 円+税)
2010 年 医学書院・刊